

【基調講演】

周縁と周縁をつなぐ—— ヘルシンキ大学ルラリア研究所との共同事業

羽 淵 一 代

こんにちは。ただ今ご紹介にあずかりました弘前大学人文学部の羽淵一代と申します。私の研究は、携帯電話の利用行動を中心としたメディア研究が一つ、もう一つは特に恋愛の研究をしています。結婚前、結婚後でもいいのですが、人と人との親密な関係性を、社会的に実証研究しているので、今日お話しする内容は、私の専門とは全く関係がありません。つまり、フィンランドの研究もしておりませんし、地域研究も弘前大学人文学部に行って、仕方がなくというか、言われてしょうがないからやっているというような人間でございます。

私自身、学部から博士課程まで、社会学のトレーニングを受けていました。私の出身大学には、社会学の先生だけで15人いました。例えば都市社会学、医療社会学、家族社会学、理論社会学、社会調査法といった形で、それぞれの専門の先生をあわせると15人ぐらいいるのです。ただ、こちらの高知大学の人文学部もそうかもしれませんが、弘前大学人文学部の社会学の教員は、私を含めて、人文学部の中には2人しかいません。そうなってくると、別にそれは社会学だけでなく、歴史学など他の学問分野の先生方も、都市部ですごく研究環境にも人材的にも恵まれた中で育って、就職で地方国立大学に来た先生は必ずそういう状況に遭遇します。つまり、「自分は若者文化論、メディアの研究をしていますから、それだけ教えていけばいいでしょう」ということにはなりません。社会学に関わる全般的なことを、他の例えば経済学や法学、また文学や歴史学の先生方と一緒に共同で研究をし、教育をし、さらに地域貢献を求められるというのが現在の地方国立大学の先生方に課せられているミッションのようなものだと、私は理解しております。

ということは、フィンランドについても素人だし、地域研究についても素人の私が、ここまでお話ができるぐらいは誰でもできるのだというつもりで、今日のお話を聞いていただきたいと思っています。

先ほど言われたヘルシンキ大学ルラリア研究所との協働という、「一緒に働く」という方をタイトルにしていたのですが、いろいろ作っている最中に、こちらの方がいいタイトルだと思ったので、多少タイトルを変更させていただきました。「周縁と周縁をつなぐ」というタイトルでお話をさせていただきます。

これは何の変哲もない、フィンランドの駅の写真です。私を含めた弘前大学人文学部にあるグループが、2009年にフィンランドを訪れたとき、「20時間ぐらいかけてやって来たのに、また青森に着いちゃったね」と感想をみんなもったんです。海外に来たというような気分がしない。

例えばこの写真を見ても、函館にいるのかというような気持ちになって、時差もあってつらい状態になっているのに、青森にいるような、北東北や北海道にいる、自分の住んでいる地域にいるような感覚がありました。



これも、これだけ見ると日本にあっても全然おかしくないというか、青森にあるような建物だということで撮ってきた写真です。

大学のグローバル化、国際化といって、どちらの言葉が良いのか悪いのかはともかくとして、国際化ということは、推進されてきました。そして今でも何かと話題になります。先ほどの岩佐先生のお言葉にもありましたが、とにかくグローバル人材を育てなければいけないというようなことを言われています。大体どこの国立大学も海外の大学と提携して事業を行ってきたという歴史は何十年もあると思います。しかし、やっている内容は何かというと、基本的には学生の留学プログラムを作る。つまり、日本の大学の日本人学生を海外の提携大学にやって、留学で何かお勉強させてくる。それから、外から留学生を受け入れるということです。これは多分、どこの大学もやっていると思います。

二つ目は、研究者も国際化やグローバル化しなければいけないということで、研究者に対しても、日本で国際学会を開催するときには、こういうお金を付けますよというような経済的な助成や、フィンランドで国際学会があると言われて、そこにアプライして通ったら、その交通費は支援するというような経済的な助成なども多分あったと思いますし、今もあります。

三つ目は、サバティカルなどの制度があるところでは、日本人研究者を海外に1～2年、あるままとまった期間送り出して、そこで研修をさせるというようなものがこれまで地方の国立大学がやれたことだったと思います。

このような取り組みは、優秀な研究者は、お金をくれるのだったら、どんどん行って国際学会で発表するとか、留学プログラムは学生のもので、研究者にはあまり関係ありませんが、サバティカルを取って海外の大学に行って勉強してきて、その成果を英語でどんどん発表していくというようなことができます。ところが、どんな組織であっても、全員優秀な組織はありません。上から1割ぐらいの人たちが、そういう制度をどんどん利用して業績を上げていきますが、それ以外の9割は地道な学内業務や教育というようなことを行っています。

確かに大学の組織は、「一生懸命国際化に努めています」と、「留学プログラムがある」、「こういう学会の支援をやっている」と宣伝しますが、組織そのものが国際的なのかというと、どう考えても9割の人たちはそういうものを使えていないので、国際的、または組織がグローバル化したとはやはり言えません。私自身も恥ずかしながら、残り9割の人間です。

これから、ルラリア研究所と弘前大学の人文学部が提携に至ったプロセスをお話ししていきます。弘前大学人文学部はどういう所にあるかということ、先ほどフィンランドの

写真を見せましたが、あの写真にあるような所です。本州の最北端で、3月の今も雪が残っています。はっきり言えば、無医村などもあったり、限界集落など、先ほど「増田レポート」の話も出ていましたが、そのうち県そのものが消滅してしまうのではないかとということも危惧されるぐらい人口減少が圧倒的に激しい場所にあります。

人文学部は、先ほど申し上げたとおり、東京や関西のマンモス大学や、旧帝大というような大学とは異なり、本当にさまざまなディシプリンの研究者の寄せ集めです。そうすると、社会学の先生、経済学の先生、法学の先生、文学の先生、哲学の先生、歴史の先生と、みんなディシプリンが違って、価値観やどのような種類の言葉を使ってものを考えるのかとか、組織はこういうものがいいというようなことの合意がなかなか難しい。さらに、これに今は文理融合を進めるよう大号令がかかっていますが、文理融合したら、合意を取ることはほとんどできません。ですから、今、文科省はトップダウンのトップに力を集めて、上の方で決めて仕事をまわしています。合意を取って何かやるというような民主的なやり方をやっていたのでは、期限内に組織が回っていかないというようなこともあるのではないかと予想もつきます。

国際化をしていこうと思ったときに、例えば外国語教育の先生などは、外国語教育は得意ですが、その国の研究をプロフェッショナルとする場合には、教育学ではなく他の分野の学問が専門領域となるでしょう。

また、分野として海外の研究と接点が少ないものがあります。例えば法律なども各国違います。もちろん国際法などをやっていたり、比較法で必ず法学の先生はどこかアメリカ法に詳しい、イギリス法に詳しいというように訓練を積んでいますが、では、実際の研究といたら、日本の個別具体的な、いわゆる判例研究をするということになってきます。そうすると、別に他の国まで行って、わざわざ法学の研究をする必要もないし、どうやって国際化したらいいかというアイデアが欠落していきます。

それから、そこまで極端に言わなくても、自分の研究のためには調査に出掛けるし、国際学会の発表もしますが、それは結局自分の業績のためにやっているのであって、大学という組織のためにやっているわけではありません。自分は勝手にやるから、他の人がどうなろうと知らない。自分は一生懸命研究をやっているから、研究をしない人が悪いのだというような言い方をするような先生などもいます。

しかし、よく考えると、今求められているのは、大学や学部全体、組織が国際化することなので、自分だけ良ければいいと考えていたのでは上手くいきません。しかし、人文学部の同僚と共同して何かをやっていくという意欲に欠ける。特に研究者は協調性に欠ける人も多いと思いますし、いろいろなディシプリンの研究者を寄せ集めるこ

とによって、国際化するというコンセプトそのものにも無理がありました。

では、なゼラリア研究所との共同をはじめることができたかということ、1人、ヤル気のある教員がいた、ということに尽きます。やはり何事も1人の人から始まるのだと思いました。グローバル経営学を専門とする森先生という方がいらっしゃいます。森先生はスウェーデンの企業経営をずっと研究されていましたが、本人はスウェーデンだけでなく、他の北欧諸国の企業経営についても調べてみたいと思っていらっしゃいました。しかし、だんだん年を取って、要職に就くようになり、忙しくなってきた、経営学なので、青森県知事からの要請など、かなり社会的な期待があつて、自分の研究だけをどんどん広げていくというのは、時間的にもいろいろな制約がありました。

そのときに青森県では、産官学の共同事業を推進する機運がすごく高まっていた、弘前大学人文学部としても、何らかのアクションを起こす必要がありました。自分の研究で、北欧諸国の他の所を見てみたいという気持ちと、人文学部の組織の中でやらなければいけない、やらされると皆さんはよく言いますが、やらされるようなことを重ね合わせて何かすることができるのではないかと、森先生は考えました。

では、産官学について何かモデルがないかと思っていたら、非常に先端的な研究をやっているのが北欧だったのです。たまたまスウェーデンのことをやっていたということもあり、ついでに産官学の先進研究もやっているということで、北欧はいいなと。さらに、思いつきですが、スウェーデンは最北端の田舎で、青森も最北端の雪国です。大都市や西日本の田舎とは全然異なっているというところで、もしかしたら青森県の地域にとって、何か面白い制度や仕組み、事業などがあれば、それを見てくるだけでも意味があるのではないかと彼は考えました。

似ているということに基づいて、自分たちが全然やったことのないようなことでもやってみるということが、今、このように共同で何かをやっていく、全然違うディシプリンの人たちが何かをやっていくときに、非常に重要なことだと思います。例えば、そういう思いつきは、地図をぼんやり見ても得ることがあります。私自身も弘前大学に行ってから、青森県の地図を見て、津軽半島と下北半島はバルタン星人の手のように2本の角になります。これを見ていたら、鹿児島県には薩摩半島と大隅半島があるじゃないか。もしかしたら、先端と先端を比べたら面白いのではないかとということで、調子に乗っていろいろしゃべって、何人かの先生と一緒に、鹿児島県の知覧町に農業調査に行きました。当たり前ですが形が似ているといっても、鹿児島と青森では全然違って、

何も似ているところはありませんでした。ただ、違うということがわかったわけですから、取りあえずやってみるということが非常に重要ではないかということをしり上げたいわけです。

森先生は忙しいのですが、産官学のそういうものを調べに行きたい、北欧の他の国にも行きたいけれども、もしやり始めたらもっと忙しくなるから、これは自分だけではできないと思われたようです。また、英語についても少々不安があったようです。そこで、英語が得意な経済学の小谷田先生を誘って、産官学のことで北欧に行ってみないかということをするわけでした。

彼らは何のつてもありませんでした。何をやったかということ、いきなり大使館に電話をして、「おたくの国に興味があるので、研究の相談に乗ってくれないか」と伝え、アポを取り、大使館に行きました。デンマークの大使館、ノルウェーの大使館、スウェーデンの大使館、フィンランドの大使館をわーっと回って、「おたくの国の産官学事業で面白い取り組みがあったら教えて」と言って、「ついでにおたくの国に調査に行くから、その対象も紹介して」ということをやります。社会学者の私から見ると、なんて乱暴なというか、こんな調査があるのかと思いましたが、反対に考えてみれば、別に大使館に行ってもいいわけです。行って「おたくの国に興味があるから相談に乗ってください」と言うのは、やれば簡単にできるし、ただ少し勇気を持ってやればいいだけのお話です。このように、ある意味思いついて、少し乱暴でも取りあえずやってみるというのが、ルラリア研究所との提携のプロセスでものすごく大事なことでした。

ここで、他の国はともかくフィンランド大使館には、フィンランドセンターがあります。そのセンター長であった火山学者のヘイキ・マキパー氏という方が応えてくれて、「セイナヨキ市がいいんじゃない？ ヘルシンキ大学のルラリア研究所もあるし、あなたたちの見たいものが全部見られるよ」ということで、紹介がありました。セイナヨキというのはどこかということ、南ボフヤンマ県の中のメインシティです。ヘルシンキから飛行機で約1時間の所にあります。

ルラリアとは、地域、地方というような意味です。地域研究所と訳せばいいのですが、わざわざ「ルラリア研究所」と言っています。これはヘルシンキ大学を含む多数のフィンランド内の大学の独立研究所で、地域研究のシンクタンクです。どのような研究者がいるかということ、まさに弘前大学の人文学部のように様々な専門家としか表現できない

ようなシンクタンクでした。社会学だけとか、地域研究をやっている人だけというわけではなく、マルチディシプリナリーで、いろいろな人を自由な発想ができるようにたくさん集めています。企業、政策、文化、コミュニティ、サービスを研究対象としているのならば、ディシプリンは問わない。異なる視点を持つ研究者や企業家、行政官、それから地域の人々といった人々が異なる背景や関心を持って、何か地域に関わる創造性に満ちた活動を何でもいいので行い、研究活動を豊穰化し、教育を充実させるといった目的を達成しようとしているところに特徴があります。

また、もちろんヘルシンキ大学がメイン大学ではありますが、コンソーシアムとしても機能していて、研究所に行くと、あらゆる大学の先生がいます。ここで申し上げるには多すぎるのでリストしませんが、研究者の関心は、その都度移っていくわけですが、地域に関心を持ったときにルラリア研究所に来て、何か研究をしていくというような契機を与える機能がこのコンソーシアムにあります。その中には例えば、フィンランドにある有名な音楽大学のシペリウス・アカデミーも含まれていたり、タンペレ大学やタンペレ工科大学なども含まれています。組織のシステムについて、説明は聞きましたが、どう考えてもまねできないような複雑なシステムになっています。しかし、やっていることは、いろいろな研究者がルラリア研究所にやってきて、そこで共同的に研究を行って、それをどんどん業績として発表したり、地域に還元したりということをやっているだけなのです。

この研究所は基本的にほぼ全員が有期雇用であり、研究費と自身の給料を含む人件費は自分自身で獲得してくださいという形になっています。研究費を獲得してきた者をルラリア研究所に入れて、その中の施設を使って研究することができるということなので、ここにいる研究者は毎回、何らかのファンドを絶対に取らなければいけないということです。もし取れなければ、ルラリア研究所には入れられないという形になっています。

この研究所があるセイナヨキのある南ボフヤンマ県の概要を説明したいと思います。なぜ説明するかというと、弘前にそっくりだからです。南ボフヤンマ県は、人口が約19万人です。ちなみに弘前市は17万人です。首都ヘルシンキから中心市街のセイナヨキまで電車で2時間40分です。弘前も東京から新幹線に乗ってやって来ると、大体3時間40分かかりますから、1時間ほど長いですが、飛行機で50分というのは同じです。第1次産業従事者が1割です。弘前市は1割を切ってしまいましたが、かなりこれに近いです。それから、第2次産業従事者が3割、そして半数以上がサービス業に従事しています。

ただ、第2次産業従事者が3割というのは、弘前はサービス業の方がかなり多くなってしまっているということがあります。しかし、1次産業とサービス業というところが似ているのではないかと。

この地域では、経済発展を目標として、食品や鉱業技術、木材などを使って起業を行い、起業精神とはサブシステムだという信念の下に、地域を形成してきました。本当にここ10年ぐらいでどんどん成長してきたというようなサクセスモデルを提供してきました。

このサクセスモデルは、食品やナノテクノロジーやバイオや情報といったような技術系の、どこにあってもいいというような工場、会社、企業を誘致したり、起業を促進させるような市の援助をすることによって、雇用創出するというものでした。これはよくあるモデルだと思います。フィンランドでは、若い世代の都会志向は日本のようではなく、彼らは、ヘルシンキで暮らしたいと思っているわけではありません。それにより、若い世代の家族が移住してくるというようなことを成し遂げてしまった地域です。

もともとフィンランドを選んだ理由は、フィンランドも地方（田舎）から都市への人口流出が激しいということも、青森県の人口問題を考えても、何か面白い取り組みがないかということで探していたので、これは本当にいいアイデアが得られるのではないかと行きました。しかし、工場を誘致して、そこに雇用を生み出すというのは、今では古いタイプになっていると思います。ただ、それが成功したというのは、産官学が一体になって取りくんだ、というプロセスにあると思います。質の高い生活を提供するためにどうしたらいいかというあらゆる実験を、ルラリア研究所を中心として、一生懸命やってきました。それがここ10年ぐらいで実を結んで、若い世代が移住してくるような土地になったということです。したがって、このモデルから学ぶことは、モデルそのものではなく、産官学一体となって、お金と労力をかけて地域活性化をおこなえば、可能性はある、というような「やる気」論でしかありませんでした。

しかしフィンランド人の、「田舎暮らしが可能ならするべきものだ」という規範意識が根付いていることが大変興味深いことでした。特に今はネットなど情報環境にも恵まれているので、生活をする分には問題がないし、彼らは田舎で暮らすことの方が意味があると考えています。要は、労働条件さえ整えば、田舎で暮らす方がより質の高い生活が送れるのだ、という意識を持っているので、若い世代がセイナヨキに移ってきたという説明を受けました。

サービス環境に関わる情報としては、文化に関わるものがありました。南ボフヤンマ県は19万人で、セイナヨキ市の人口は6万人弱です。この地で開催されるタンゴフェスティバルに10万人が来たり、若者の祭典で「プロヴィンシロックフェスティバル」といって、向こうは夏は白夜なので、1日中、ロックを流す祭典があり、そこに10万人の観光客が訪れたりします。

日本でも、北海道や福岡などで開催されるロックフェスティバルやジャズフェスティバルなどにも、10～20万人というような若者が集まることを考えても、やっていることに特段の新しさはありません。おなじみのサービスを提供することでセイナヨキという市の名前を売り出すのには成功しています。

それからもともとフィンランドは木材加工の文化がありました。木材加工の文化とアーティストの育成について知るために、アルティザンにも行きました。市の援助を受けて、工房を持って、そこで家具を作ったり、アートを作ったり、さまざまな細かいテキスタイルの製品を作ったりするような取り組みなどもあります。公的にサポートされたアーティストを中心として市民が非常に文化的な生活を送っています。

青森とフィンランドの地域問題は、雪の問題、それから人口問題、それから青森が一番困っていたことは、第2次産業がほとんどないということです。八戸に少しありますが、ずっと農業と漁業が中心産業でした。普通、近代化というと第2次産業が興隆して、その後第3次産業が興隆していくのですが、割と突発型の近代化というか、第1次産業がずっとあったところに、いきなり東京から落下傘型に近代が降ってくるような、2次産業がない状態の近代化を経験しています。

フィンランドもスウェーデンなどといった隣国の巨大工業国があって、そこに押されて工業化することがなかなかできませんでした。ですから、第1次産業が中心産業の時代が長く、90年代にノキアという有名な携帯電話の会社がありますが、情報産業がどつとやって来るというような歴史を持っています。

青森とフィンランドとを並べて考えるならば、このように問題点が似ています。さらに自殺率も青森県は高いですが、フィンランドも非常に高いです。同じ問題を抱えていて、それを研究してきているので、森先生や小谷田先生たちはルラリア研究所の연구원たちと意気投合したようです。

経済的なことをお話しすると、学部長裁量経費という学部長が使えるお金が人文学部にある程度あります。その中に、研究や教育のための競争的資金が含まれており、企画書を提出し、それが精査されて、支出という形になっています。提携への始動をした頃

は、学部長裁量経費なんて学部のスタッフはほとんど見向きもしていませんでした。人文の先生は外にも出掛けないし、必要なのは書籍を購入したり、報告書を作るぐらいなので、報告書の印刷費をくれということはありませんでしたが、海外に行くお金をくれという人はあまりいませんでした。このときの石堂学部長に「弘前と非常に似ている問題を抱える地域の研究をしているルラリア研究所があるので、今度行きたいのだけれども」と言ったら、「ああ、いいよ。行ってきなさい」と言って、ぽんとお金をくれて、小谷田先生は年間で、多分100～200万円ぐらいは学部長裁量経費のサポートを受け、人文学部の先生を連れてルラリア研究所に行くということを2年ぐらいおこなったようです。セイナヨキで調査を始めた、ルラリア研究所の研究員と国際学会で共同発表したり、論文執筆を行うことができました。

そして、この取りくみを単発で終わらせるのかという問題があって、サミ・クルキ氏というルラリア研究所の所長に相談したら、「ヘルシンキ大学はいわゆるフィンランドの東大です。格が違うということで、弘前大学と提携なんてあり得ません」と言われたようです。ところが、「研究所レベルだったら、別に僕がサインするだけでいいから、提携できるよ」とすごく簡単にことが運んでいったようです。

2010年に提携をして、私を含む社会学のチームもルラリア研究所に行って、そこで社会調査実習という学部教育カリキュラムを基軸としておこなってきた地域研究の成果を発表し、ルラリア研究所の似たような研究をおこなっている人を2～3人紹介してもらいました。

さらに、『故郷サバイバル』という本をフィンランドのチームと共同で出版することになりました。とにかくルラリア研究所に行って、なぜわれわれがこんなにうまくいろいろできたかという、毎回の調査に必ずルラリア研究所の研究員がアテンドしてくれたということが大きい要因としてありました。彼らもそれに関心があるというか、もちろんセイナヨキの問題やセイナヨキで何をやっているかということの研究員の誰かが必ず同伴し、一緒にヒアリングをしました。

ここで申し上げたいのは、どんどん人口が減少してきて、シュリンクしていきませんが、そのとき小さいからこそ、縮小しているからこそ、縮小している別の地域とリンクを張っていくことができるという考え方です。もしも、これが東京だったら、もっと大きな話になると、簡単にみんなでやろうという感じにはなかなかありませんが、人数が少なく、非常に小さな規模だったら、フットワーク軽く様々な組織や人とつながっていくこ

とができます。ということは、周縁の地方国立大学では、世界の周縁にある同じような、似たようなことに関心を持っている地域を探して、つながることが面白いのかもしれませんが。大学や研究所であれば、必ず研究者がいるので、その人たちとまず会ってみてから何をするか考えるというぐらいの軽い気持ちでやっていくことが大事だと思います。

弘前大学人文学部のこの取りくみに関わる課題は、森先生からはじまって、その後、森先生が手を引いて、小谷田先生が1人で引き受けているということだと思います。つまり、1人から始まって全体のものにはなりましたが、やはり継続させているのは、小谷田先生の不断努力による、マネジメント力が大きい。いわゆるカリスマモデルだということです。

大体、地域活性化なども最初に始めるときにはカリスマモデルがいいと思いますが、それだと継続していきません。では、組織（行政）主導モデルがいいかどうかという、行政主導モデルは人々のやる気が起きてきません。

私自身が提唱したいのはサークルモデルです。いる人を何人か集めて、それが全然違うディシプリンでも、全然違う価値観でもいいので、まず集まって、われわれだったら、この3人だったらどんなことができるかということ、人を見て決めていく。ですから、先に何か目的があるのではなくて、先に人があって、その人たちでできる目的を設定してやっていくということです。これはアートコラボレーションなどでもよく使われている手法です。目的が先にあって、その人がいなければできないというような編成にしてしまうと、続いていかないのだろうと思います。むしろいる人でやる。いる人の中で、いる人ができることで目的を設定して、目的を達成していくというやり方が多分いいのではないかと考えています。それに今、より発展的に変化していくためにどうしたらいいかということも、小谷田先生や周りの先生たちで話し合っている最中です。

最後に募集です。皆さんの中で、今日のお話を聞いて、ルラリア研究所、セイナヨキに関心のある方、行ってみたいという方がおられましたら、私に声を掛けてください。人文学部の小谷田先生や他の先生が行くときにご一緒させていただいて、ガイドもやりますし、ルラリア研究所の似たような研究をやっている先生を紹介することもできます。また、合同研究会を開催することもできるので、もし関心がありましたら、どうぞ声をお掛けください。これで、私の発表を終わります。ありがとうございました（拍手）。

（はぶち いちよ 弘前大学准教授）